西高校生レポート

西高農場は、地域とともに先端技術の研究･研修、憩い、自然とのふれあいの『場』として開放しています。

～最先端の機器に触れ、今後の農業について考える～

能代西高校では６月27日、生物資源系列の３年生18人を対象とした「ドローン体験講習会」を開きました。最新の農業機器について学び、操作を体験することで農業についての関心を高め、農業後継者育成を図ろうと池田グリーン＆アグリ事業部と秋田スカイテックの協力のもと実施されました。

はじめに会議室で「無人ヘリの歴史と変化する農薬散布の現状」と題した講話が行われ、秋田スカイテックの担当者が、農薬散布に使用される無人ヘリと急速に普及が進んでいるドローンについて説明をしました。担当者は、無人ヘリができて約30年が経過し、現在では3,000機弱（ヤマハ製）生産されているのに対しドローンは３年で約300機生産されていることに触れ「無人ヘリの操作は一定以上の技量や経験を必要とするが、ドローンは初心者でも操作しやすく、購入した日に使用できる。価格も無人ヘリの５分の１程度なので、多くの会社がドローンの製作に参入している」と話しました。

また、実際にドローンを使用している生産者の声も報告され「一斉防除と違い自分の都合でできる」、「作業効率があがった」などが説明されました。一方で、ドローンは小型のため、「一度に積める農薬の量が少ない」、「１回のフライトで10分程度しか飛行できない」などの課題もあり、今後改良が加えられていくのではないかと話していました。

その後、体育館に移動し生徒らがドローンの操縦を体験しました。離陸や着陸、前後左右など操作方法を指導してもらい、生徒らは緊張しながらも真剣に操縦をしていました。操縦した生徒は「初めてドローンを操作したが意外と簡単だった。講話とこの体験を通して技術の進歩を実感しました」と話してくれました。

←真剣な表情でドローンを操作する生徒

←このように見えています

↑無人ヘリ（左）と農薬散布用ドローン（右）

最後に担当者から「ドローンで収集したデータを使い、育成管理など様々な用途に活用でき、経験からデータへと今までと違った農業の形が形成されてきている。みなさんも自分の学科でドローンがどう活かせるのか考え、魅力のある農業を実現してもらいたい」と話してくれました。